Mario J. Azevedo and
Emmanuel U. Nnadozie

Chad : A Nation in Search of Its Future.

Boulder : Westview Press, 1998, xvii + 170 pp.

佐藤　章

本書は，Westview Pressの企画する「現代世界の国々：アフリカ」(Nations of the Modern World : Africa) シリーズの21番目の著作として公刊された。同シリーズは，アフリカ各国について1国1冊の形でとりあげ，地理，歴史，経済，国際関係などの側面に幅広く目を配りつつ，筆者の専門領域や独自の観点を活かして国のありさまを記述するのを基本コンセプトとしている（1988年のシリーズ刊行開始当時は「今日のアフリカの国々」Nations of Contemporary Africaというシリーズ名であった。現在までにモザンビーク，ザンビア，サントメプリンシペ，タンザニア，マリ，赤道ギニア，ニジェール，モーリシャス，ジンバブウェ，ナミビア，ギニアビサウ，ガボン，ザイール，ケニア，マダガスカル，カーボベルデ，ウガンダ，セネガル，ブルキナファソ，アンゴラについての各巻が既刊である。一部はすでに改訂版も刊行されている)。

さて，アフリカ中部に位置するチャドを扱った本書も，同シリーズの基本コンセプトにしたがった構成を採っている。まず，第1章で地形や気候などの地理的側面が概説される。「チャドの歴史」と題した第2章では，植民地化に先立つ時代の同地域での諸国家の活動，フランスによる征服と植民地統治の実態，独立を見据えた政治活動の展開が解説される。第3章は「チャドにおける政治動向と内戦」と題され，1960年の独立とトンバルバイエ政権による統治，75年のクーデターによるマルーム軍事政権の成立，グクーニ，ハブレ両派による内戦，イドリス・デビ（現大統領）の台頭という政治の主だった流れが記されている。

チャドは今日国際機関の各種指標から言われる最貧国であるが，第4章では同国のかかる経済状況が解説されている。財政，貿易，国際収支における赤字の恒常化と低成長，国際援助への依存などといった同国経済の主要傾向が解説され，その要因として外生的なもの（植民地支配の遺産と隣接諸国の干渉）と内生的なもの（内戦，気候・環境の悪影響，政府の経済政策の不十分さ，内陸国という条件）が並列的に指摘されている。「社会と文化」と題した第5章では，主要民族，教育，保健，宗教について概説されている。第6章は国際関係を扱っている。内戦期のチャドにさまざまな干渉を行ってきたリビア，ナイジェリアなどの近隣諸国との関係と，リビアの干渉を問題視して内戦に介入したアメリカ，フランスとの関係を中心に解説がなされている。

本書について著者は，チャドに対する研究者の関心は必ずしも高くないとの認識を示したうえで，「この国の複雑性に分け入ることで，今日のチャド理解に寄与し，1960年代半ば以降の同国で展開した出来事を脱神話化すること」(p. 2) を目的としたい旨表明している。紙幅の制約ゆえの物足りなさが一部感じられるものの，依拠した資料や文献が豊富な注によって的確に示されたていねいな記述が全編にわたって貫かれ，著者の意欲がよく反映された内容となっている。

フランスによる植民地支配の実態に関する記述（第2章）はとくに充実している部分である。いち早く「平定」に成功した南部地域から，フランス植民地当局が人員徴発を行い，植民地軍として征服作戦に動員した過程，また，行政官不足を補うため行政首長制が整備され，かくして確立された間接統治システムを介して，雑役，強制栽培（綿），鉄道建設，荷役などのために労働力が強制的に動員された過程，これに対して現地住民が逃散で抵抗し，隣接植民地への移動が恒常化したことなど，植民地支配に伴って同地域にもたらされた社会変容が説得的に記述されている。

概説書を基本コンセプトとしながら，分析の厚みにも十分留意されており，一国研究の足がかりとして好適な本である。

（アジア経済研究所地域研究第2部）